築城技術者の実態と系譜

伊藤俊治

はじめに

中近世城郭の築城がどんな人々によって行われたかは、謎の部分が多い。作事や、石垣構築などについては研究の蓄積もあるが、「縄張」と称される築城プランニングも作事や石垣のように「専門家」が行ったのかなど、「Ｗｈｏ」については未知の部分が多い。伊藤ていじ氏や中井均氏らの紹介によって、西国の「城作」と呼ばれる縄張技術者らしき人々の存在が知られるようになったが、その実態はよく判っていない。

また、今世紀初めの齋藤慎一氏の問題提起は、従来の「大名系城郭論」に疑問を投げかけ、「大名間を移動する縄張技術者集団」の存在を示唆するもので大いに議論となったが、その後議論は「縄張を実際に行ったのはどんな人々か」という論点からは離れていき、この問題については議論が深まっているとは言えない。

そこで各城郭の縄張・築城担当者とされる人物を各地の自治体史や『日本城郭大系』などから拾い出し、その典拠史料にどう記述されているのかを収集・分析して、第36回全国城郭研究者セミナーで発表した。その前半部分、縄張・築城担当者の実際の業務内容と、縄張の要素技術については「築城技術者に関する試論」として既に発表した(1)。

一　縄張の要素技術

前述の拙稿(1)の内容を簡単に述べておきたい。前稿では、『天文日記』や『多聞院日記』に登場する「城作」と称される技術者について改めて検討し、彼らは、政治的陰謀に荷担したり戦闘で死亡したりする、単なる技術者とは若干異なる存在であったことを確認した。

この「城作」に相当する人物の事例を各地の城郭で探し表1にまとめた。紙数の関係でウェブ上に掲載する(2)。

表1の事例から読み取れる次の三点を上げて論じた。

① 現在「縄張」とされる行為について様々な他の用語も使われており、語義や用例から大きく三つに分類される

② 縄張という語が使われている場合も、単なるプランニングと違った意味で使われていると思われる事例がある

③ 縄張で「絵図」あるいは「指図」が使われている例が多数ある

検討の結果、「縄張」という語で記述される業務は、単に築城プランニングだけでなく、選地・測量・絵図作成・祭祀などの要素技術を含むこと、織豊期まではその担い手の中に「大名家の外からきた技術者」がいた事を示して、この技術者たちが「城作」の実態ではないかと考えた。

また、どの要素技術に関しても、外部技術者→担当家臣という変遷の傾向があることも明らかにした。これは織豊期以降、技術者の家臣化や他の家臣への伝授により大名家中へ技術が移行し、「縄張」業務は大名家の担当家臣によって行われるようになったと考えられた。

本稿では、次に築城担当者の人物像と技術伝播の問題を考察する。

二　築城を担った人々

表に挙げた事例からわかることとして、「誰がその作業を行っているか」について二点を挙げておきたい。

（ア）初期の築城担当者とされる人物は、大名自身あるいはかなり高位の武将である場合と、他の史料にあまり出てこない無名の人物である場

合とに二極化しているように思われる。

（イ）多くの城郭では、普請担当者の名前のみ知られている

（Ⅰ）無名の築城技術者たち

まず（ア）についてであるが、『天文日記』などの「城作」や表に登場する多くの築城担当者は、他の史料には殆ど登場しない無名の人物で、多くは譜代の家臣ではなく外から大名家中にやってきた者たちである。

典型として武田家の例を『甲陽軍鑑』に見てみると、本編中に九カ所、末書に二カ所の「縄張」の用例がある(3)。史料としての信憑性はさておき、それらの用例は、山本勘助が城取（築城）に長けた者として採用されたというエピソード（巻九の十二、末書上巻）、勘助が縄張の子細を信玄（巻九の十八）や馬場美濃守（巻十二の十六、巻十六の城取の事）に相伝したエピソード、勘助自身の縄張・築城（巻十の廿三）、および馬場美濃守の縄張・築城（巻十三の十九、巻十九の八、末書下巻）と、ほとんど山本勘助に関係した記述であることは、注目される。築城を意味する「城取」の語はもっと幅広く使われているので、『甲陽軍鑑』においては「縄張」と「山本勘助」は強く結びついていると言える。

山本勘助の実像はよくわからないが、兵法の知識や技術を持ち、仕える主君を求めて諸国を放浪していたという『甲陽軍鑑』における人物像は、天文期の「城作」を連想させる。

同様の事例は他にも認められる。つまり、出自のはっきりしない人々が、外からやって来て大名家に雇用され、城郭の縄張をするという事例である。表に挙げた例では、弘前城を縄張した東海吉兵衛、岡山城の中村次郎兵衛、豊後佐伯城の市田祐定がそうである。有名なところでは藤堂高虎の家臣で各地の城を築いた渡辺了もそうした例であるし、高虎自身も同様の存在であると言ってもいいだろう。彼らが「城作」であったとは言い切れないが、少なくとも前段階の「専門技術者」と縄張をする「大名家臣」の間をつなぐ存在であろう。

「城作」は、築城事業毎に移動する、大名からは独立した「職人」なのだろうか。石工や大工などにはそのような例があるのはよく知られており、齋藤慎一氏の当初の仮説もそのような築城職人集団を想定していた(4)が、「城作」については少し違ったありようで、戦闘や政治的陰謀に関わるなど、「職人」と言うよりは、もっと大名家中への仕官を志向している存在、「兵法者」に近いように感じられる。

「城作」が独立した職人ではないならば、大名家を超えて築城技術はどのように伝播したのか。次にそれを5つのパターンに分けて考察する。

（Ⅱ）築城技術の伝播

前稿で検討したように、測量や絵図作成、築城時の祭祀などの縄張の要素技術は、最初は「専門技術者」によって行われていたが、次第に大名家中の担当者によって行われるようになる傾向がある。つまり技術が大名家中において伝播・習得されるわけである。『甲陽軍鑑』においては、武田家において縄張技術は、山本勘助→武田家臣というように伝達されている。これが技術伝播の第1のパターンである。

「城作」や山本勘助ら「専門技術で大名に雇用される技術者」を、縄張をする人々の第1の類型とするならば、第2の類型は、「縄張技術者」から技術を学んだと思われる家臣たちである。前述のように『甲陽軍艦』では勘助の縄張技術は、勘助から馬場美濃守に伝授されている(5)。

さらに織豊期に入り各地の大名の消長が激しくなると、「技術を学んだ家臣」の移籍によって、大名家を超えた伝播が見られるようになる。これが技術伝播の第2のパターンである。例えば、武田家滅亡の後、他の大名家に雇用された武田遺臣たちの中には、「甲州流」をもって縄張を行う者が見られる。蒲生家中に入って会津若松城を縄張した曽根昌世や、井伊家に仕えて彦根城を縄張した早川幸豊や孕石泰時がその例であり、江戸城の縄張に関わったとされる小幡景憲もその一人として良いだろう。

先に挙げた「山本勘助の同類たち」の中では豊後佐伯城の市田祐定の例が興味深い。伝承によれば市田祐定は安土築城に参加した信長遺臣で、佐伯の初代藩主・毛利高政に招かれて佐伯城の縄張を担当した。完成後、子息の二郎兵衛定勝を佐伯にとどめ出身地の近江に帰国したという。市田祐定の実像を示す一次史料は乏しく、出自もはっきりしないが、近江には市田清兵衛や市田喜助という有名な近江商人が知られる。彼らと市田祐定が同族であるかどうかは判らないが、市田清兵衛の先祖は六角氏の家臣であると伝えられるし、市田喜助の祖も武士であるという(6)。もしも市田祐定も元・六角家臣であるなら、六角→織田→毛利と主家を変えながらも仕官しようとする「縄張技術者」の姿が浮かび上がってくる。

さらに移籍した家臣から移籍先の他の家臣に技術が伝播する場合もある。第1、第2パターンの複合であるが、例えば、武田遺臣の曽根昌世は、蒲生家に仕えて会津若松城を縄張するが、この技術は蒲生家廃絶後は金森内膳によって伊達家に移り、仙台城に結実する。

第3のパターンは、天下普請のような大名のレベルを越えた大規模築城によるものである。これは以前から指摘されており、いわゆる織豊系と言われる築城が全国に広まったのは、大坂・名護屋といった天下普請に動員された大名が、そこで技術を学んだからであると推測されている。表1に現れた技術の伝播と思われる例を図1にまとめた。図1は、主に慶長期以降に徳川氏が行った築城での担当者の連続を示したものである。図1からは、徳川家への外からの技術の伝播には、二つの契機が有ることが判る。一つは大名家の廃絶である。図1の左側で大きなグループを作っているのが、武田、織田、滝川の三つの大名家の出身者で、主家が没落した後、他家へ仕えて築城に関与した者たちである。もう一つは大規模築城で、徳川氏の初期の築城は主に三河以来の古参家臣によって行われているが、天下普請等の際には武田系・織田系など様々な技術を持つ者が同時に働いており、そこで技術の伝播があったことが想像される。

第4のパターンは、仕官を求めて放浪する「城作」たちの横の繋がりである。先に挙げた佐伯城に関して、一つ面白い伝承が伝わる。ある時、宇和島の宝珠という山伏が知人である市田祐定を訪ねて来るが、宝珠が宇和島築城に関わっていたことを知った毛利高政は、彼に築城の監督を命じた。城の完成後はその秘密を守るため佐伯に留まることを命じられ、そこで亡くなったという(7)。このエピソードは、築城技術者の間に所属する大名家を越えた繋がりが存在した可能性を示しており、他の専門技術職の有り様との類似を思わせる。

「城作」たちの横の繋がりが何なのかは不明であるが、表を見ると、名前の挙がる人物の出身地には偏りが感じられる。必ずしも城郭技術の先進地域とは限らず、例えば表では近江を出自とする者が目立ち、有名なところでは滝川一益、藤堂高虎がそうであるし、高虎の家臣の渡辺了、高知城の縄張をした百々安行、前述の市田祐定、今井寺内を築いた河瀬兵部丞もそうである。山本勘助についても近江出身説がある。こうした

地域的繋がりも「城作」たちの繋がりの一つかも知れない。

第５のパターンは戦いによって城郭技術が移転するケースである。戦闘の際に、他家の優れた城郭に接すれば、それを参考にしたり模倣しようとするのは自然である。史料に現れる例はあまりないが、松岡進氏が示した駒ヶ嶺・蓑首両城の接収に伴う相馬から伊達の築城技術の伝播の例は、そうした事例の一つであろう[8]。

（Ⅲ）縄張する大名たち

前項で「城作」に類する無名の人々について検討したが、近世初期には、藤堂高虎や加藤清正、黒田如水のような「築城の名手」と言われる大名が出現する。彼等の多くは、自ら領国の城以外でも多くの「縄張」に関与し、他の大名の築城に「助言」している。これらの人々の「縄張」と、前項までに述べた「城作」たちの「縄張」は同じ内容であろうか。

前稿で検討したように、大名自身や高位の武将が縄張に関わる場合、地選・選地・城取（立）・見立・見分といった言葉が使われることが多く、実際の作業としては、「選地」である事が目立つ。

また「築城の名手」と言われた高虎や如水が、諸大名にどんな「助言」をしたかを見てみると、「是究竟ノ地ニテ富貴繁昌トモニ備リ要害能ク諸方ノ船路便ヲ得テ国主ノ居城ニ相合タル地形ニテ候」[9]、「縄張官兵衛殿被仕候　御意にハ、あたりに川など於有之ハやがて城下江川など入候様に見合縄張すべき也」（傍線は筆者。以下同様）[10]など主に選地に関わることで、現代の我々が「縄張」といって思い描くような虎口構造や横矢がけといった細かな造作に関わった例はほとんど無い。

大名自身による「縄張」について興味深い事例として、吉川広家による岩国城築城（慶長六年）を挙げたい。前稿では、岩国市史に紹介されている、在京の広家と現場の普請担当者が絵図を用いて築城の指示や報告のやり取りをしている事例を示した（慶長七年五月二十八日付吉川広家書状）。この書状をさらに見てみると広家は「絵図之旨、以口上申越通聞届候」と述べた後、「北への出し、無地形候ば、無用之事」、「南之小丸くび、門明候様子、随地形可申付候。東之方、尾崎へより候ても不苦候事」、「天守は（中略）両用見合分別候て、地取可然候事」などとあり、地形に合わせて柔軟に普請するように指示している。

注目されるのは、重要な防御施設「出し」の有無や、門の位置、天守の詳細といった縄張上非常に重要な事項に関しても、現地担当者の大幅な裁量に任せている点である。

この事から考えると、縄張の実際は、①城主または家中で軍略に秀でたものが、地形を描いた絵図などを元に、選地とグランドデザイン（郭のサイズ、大きさなどの大まかな仕様）を策定、②現場担当者が、儀式を実施し、測量を行い、地形に合わせてプランを微調整、細かい防御施設（堀、土塁、虎口構造）を設置する、という２段階だったのではないだろうか。表には①②の両方の段階の担当者が混在しているのであろう。自らの居城では①のグランドデザインを行った藤堂高虎も、伏見城や江戸城の築城では部分的な縄張（②の段階の「縄張」）を行ったに過ぎない。このことからも「縄張」はグランドデザインと部分プランニングとに分かれており、分担して行われていることが分かる。

このように戦国末期～近世初期の大型の築城では「縄張」は①選地を含むグランドデザイン　②細部のプランニング　に分かれており、②の部分は、戦国期には測量や宗教儀式などの専門家（＝「城作」か）によ

って担われていたものが、近世初頭には専門知識を持った家臣や家臣化した技術者によって行われるようになったのであろう。

一つの問題は、従来「大名系城郭」と呼ばれてきた技術というかコンセプトは、①②どちらの段階の「縄張」の事なのか、あるいは両方を含むのか、という事である。これを混同すると、議論がかみ合わなくなるのではないだろうか。例えば①は征服者の織豊系部将（あるいは後北条氏）が行い、②はその家中に新規に取り込まれた在地の人物の仕事ということもあり得るからである[11]。

さらに「グランドデザイン」も、実際に誰が行ったのかは難しい問題である。秀吉、家康、秀忠は縄張を自ら行っている例があるが、どの程度のものだったかについては疑問もある。例えば『高山公実録』に見える二条城修築の記事に見えるエピソードをあげたい。このエピソードでは、高虎が秀忠に良悪の二つのプランを提出しており、その理由を問う家臣に対して、高虎が答えるには、もしも出来の良いプランだけを提出した場合には「上様の御縄張にてハ無之、和泉か縄張にて候」、良悪二つを提出すれば「二通の内此絵図ハあしく候間無用にて此絵図能候条是に究め候へと被仰出候へハ上様の御究めの縄張に成」と述べている（巻四十四　延宝西島留書）。そのような状況は容易に想像できよう。

以前から指摘されているように、中世城郭に関する書籍では頻出する「縄張」という語は、実は中世の一次史料にはほとんど登場しない。例えば当時の語彙を伝える重要な史料である『日葡辞書』には「なわばり」の項目はない。さらに縄張上重要な防御技法である「横矢がかり」という言葉も、実際に築城が行われた中世・近世初頭には使用例がない。

これらを考え併せると、少なくとも近世の城主クラス以上の武将が考える「縄張」とは主に選地のことであり、虎口構造や横矢がけといった細かな造作はあまり彼らには重視されていないように思われる。後述するように、多くの場合、それらは無名の「普請奉行」の役目であった。これが「縄張」と言う用語が戦国期にはほとんど用例が無く、また、（イ）に挙げたように多くの城郭で普請担当者のみが知られる理由ではないか。

（Ⅳ）普請奉行の重要性

築城に関する記録を調べていると、よく出会うのが「普請奉行」という語である。「普請の惣奉行仰せ付けられ」等の表現を頻繁に目にする。

一般的なイメージとしては、「普請奉行」とは、築城に関わる財務や管理業務、労働力や物資の手配、工事の現場監督などを行うと考えられている。しかしながら、その職務についての分析はあまりされていない。

図1に示した築城担当者のほとんどは、こうした「普請奉行」として名前の挙がる人物である。特に徳川氏による天下普請を見てみるなら、彦根城（慶長八年）や慶長十一年の江戸城の築城時こそ、高虎や武田遺臣が名を連ねるものの、次第に彼らの関与は薄まり、やがて「普請奉行」だけによって築城が行われるようになっている。元和以降の築城には選地の必要が少ないためでもあるが、この段階では曲輪配置のようなグランドデザインの技術をも「普請奉行」が会得したためとも考えられる。

普請奉行の業務は単なる土木工事での人夫の監督というようなものではなく、もっと専門性の高い職務だったことが考えられる。前項で縄張が、①グランドデザイン、②細部のプランニング　に分かれる事を見てきたが、普請奉行の業務の中に②の部分が含まれたとしても不思議はない。前節で挙げた、岩国城の事例を考えても、大名の家中で、横矢がけ

や虎口構造などのいわゆる「縄張」技術を駆使したのは、こうした「普請奉行」たちだったのではないだろうか。「普請奉行」に任じられた人々の出自や系譜を検討する必要を感じる。

まとめ

以上、戦国期～近世初期に「縄張＝築城プランニング」を行った人々について検討してきた。当時に「縄張」と呼ばれた過程は、選地・易占・絵図作成・測量・祭祀などの要素技術を含み、それらの専門技術者と考えられる「城作」によって行われていた。彼らには家臣化への志向があり、彼らが家臣化したり技術が家臣へ伝授されたりして大名家中へ技術が移行する。

築城プランニングとしての「縄張」については、少なくとも２段階があり、当時大名たちに重視されていたのは、主に選地とグランドプランの作成であった。現在言われる「縄張」技術のイメージである横矢がけや虎口の設計などは、天文期頃には「城作」などの技術者によって行われ、戦国末期からは「普請奉行」と呼ばれた現場責任者によって行われていた可能性が高い。このように縄張が多段階で行われ、それぞれ担当者が異なる可能性については、今後個別の城郭について縄張の検討を行う際に、十分考慮しなければならないだろう。

こうした技術は大名家の廃絶による家臣の移動や、太閤検地・天下普請といった機会によって諸大名の間に普及していったと考えられる。

本稿での検討は悉皆的なものではなく、また編纂物や軍記物などの信憑性に問題のある史料からの推測も含んでいる。今後、史料の漏れや誤りのご指摘をお願いしたい。

註

⑴ 拙稿「築城技術者に関する試論」（『文献・考古・縄張りから探る近畿の城郭』戎光祥出版、二〇一九）

⑵ 次のＵＲＬまたはＱＲコードを参照
https://www.komazawa-u.ac.jp/~kazov/chuioken/books/mans/ito2019-table1.html

⑶ 検索は『甲陽軍鑑大成　索引編』による。

⑷ 齋藤慎一「戦国大名城館論覚書」（『戦国時代の考古学』　高志書院、二〇〇三）

⑸ 「当家の城取ハこの勘助流也。勘助馬場美濃守によく相伝す」（『甲陽軍鑑』巻十六）

⑹ 平瀬光慶『近江商人』（近江尚商會、一九一一）

⑺ 宮明邦夫『佐伯藩』（現代書館、二〇一〇）

⑻ 松岡進「伊達氏系城館論序説」（『中世城郭研究』一二、一九九八）

⑼ 高松城についての東藤高虎の助言（『南海通紀』巻之二十）

⑽ 広島城についての黒田如水の助言（『川角太閤記』）

⑾ 例えば服部英雄氏は、秀吉の朝鮮出兵で作られた倭城外郭線の城門が簡素で枡形を持たないものも多く見られることを指摘して、「外郭線（の構築）は現地（朝鮮）の新支配者と技術者に委ねられたのではないか」と述べている（「鎮西名護屋城と倭城」（『史跡で読む日本の歴史８　アジアの中の日本』吉川弘文館、二〇一〇）